令和七年八月一五日（金）佐賀新聞

私たちは、戦争を「語り継ぐ」世代です そして、「平和を守る」世代です

つなぐ 戦後80年さが

戦争の記憶を呼び起こし 平和の尊さと共に次の世代へ

聞き書き企画「つなぐ」取材班 大田 浩司

佐賀新聞社に寄せられた「つなぐ 戦後80年さが」に関する手紙やはがき

「つないでもらえませんか」。武雄市山内町の山内中の中島浩太郎教諭(35)から連絡を受け、町内に住む杉原啓子さん(86)を紹介した。長崎原爆の被爆者の杉原さんは、戦争体験者らの聞き書き企画「つなぐ 戦後80年さが」で5月3日に掲載していた。

反響大きく 教育現場で活用、地域の惨禍を再認識

「つなぐ」で取り上げたのは4月5日から8月15日までで20人となった。掲載した後、連絡を取りたいとの問い合わせが寄せられた。山内中では、生徒会長が保護者から杉原さんの記事を見せられて興味を持ち、教諭に話が聞けないか依頼したという。

杉原さんは7月末に来校し、生徒会の役員4人からインタビューを受けた。その様子を動画で撮影し、9月の学校の平和学習で上映する予定だ。「なぜ被爆のことを話す決意をしたのか」「楽しかった思い出は」…。質問に対し、杉原さんは丁寧に答えていた。

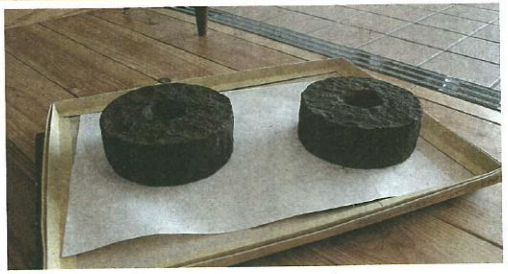
中島教諭は「教科書に載る戦争には佐賀は出てこない。『戦争がない今が一番幸せ』という杉原さんの言葉に考えさせられた。体験談は重みが違い、自分自身、戦争のことをきちんと教えてきたのか、考えさせられた」。深い学びがあった点を強調した。

「つなぐ」は、薄れつつある戦争の記憶を呼び起こし、平和の尊さとともに次の世代へ継承していくことを記事に込めている。

戦争に関する記事を通して、分からなくなった事実を掘り起こすことにもつながった。佐賀空襲で深刻な被害を受けた佐賀市北川副町で、焼夷弾の残骸が保管されていたことを報じた。その後、市内の諸富町や川副町の読者から「同じ部品を所有している」という情報が寄せられて続報を出し、「つなぐ」でも紹介した。61人が犠牲になった地域の戦禍の歴史を見つめ直すことができた。

「つなぐ」で紹介した海軍の飛行機搭乗員の記事も反響が大きかった。「戦死した肉親が同じ勤務地だったので、話を聞きたい」「特攻で亡くなった同期生について知りたい」との連絡があった。戦没者に関する情報は、戦地の混乱や軍事機密などから亡くなった場所や経緯が不明なケースが多い。手がかりとするために情報を知りたいという切実な思いを感じた。

インタビューに応じてくれた方やご家族から「掲載されたらいろんな人から連絡が来た」「1カ月は電話が鳴りっぱなしだった」との後日談を耳にした。記事が結んだ縁、取材への協力に感謝しながら、企画を続けていく。



上 杉原啓子さん（右）から被爆体験を聞く生徒会の生徒たち＝武雄市山内町の山内中 下 佐賀空襲の焼夷弾の残骸。佐賀市で保管されていることを報じると、さまざまな情報が寄せられた＝佐賀市川副町の西川副公民館